

JSOG Newsletter

# Reason for your choice

No.17  
October  
2015

わたしたちの医療は“新しい生命”を生み出すためのものです。ひとつでも多くの生命の誕生のために。すべての女性のために。いま、わたしたちができることを...

公益社団法人 日本産科婦人科学会  
JAPAN SOCIETY OF OBSTETRICS AND GYNECOLOGY

## 新理事長からのメッセージ

皆さん、こんにちは。6月20日付で理事長に就任しました藤井知行です。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

日本産科婦人科学会の目的は、「産科学及び婦人科学の進歩・発展を図り、もって人類・社会の福祉に貢献すること」です。私たちはこれまで、女性と生まれてくる子供たちの幸せのために、多くの事業を展開してきました。その上で、今後さらに取り組むべき課題として、1. 女性の健康増進と少子化対策に積極的に貢献すること、2. 産婦人科新人医師の減少に歯止めをかけ、地域間格差を減少させ、産婦人科医療の未来像を示すこと、3. 国際化を推進し、世界の国々から産婦人科のリーダーと認められることを挙げたいと思います。まず第1の課題ですが、女性が多方面で活躍するためにはどのような健康支援が必要なのか、その中で、妊娠し、出産することの障害になっていることは何なのかを明らかにし、社会に対策を提言していきたいと考えています。また、一度も健診を受けずに危険な出産をする女性があります。望まない出産の結果として、生まれた子供が虐待を受けるケースもあります。こうした人々に目を向け、お母さんと生まれた子供たちが幸せな人生を送れるよう支援するシステムを作っていきたいと思っています。第2の課題ですが、新たに産婦人科医師になる若い医師の減少が止まりません。私はこの問題の解決には、若い医師の知恵を借りる必要があると思っています。医学生や初期研修医の皆さんが、どのような基準で診療科を選択するのか、何を希望しているのかを一番よく知っているのは、同世代の若い産婦人科医師です。また、学

## 産婦人科の未来を切り開いていきたい!

会の発展に、若い産婦人科医師の斬新な発想が不可欠だとも考えています。若い世代の積極的な学会活動を促していきたいと思っています。産婦人科医配置の地域間格差もなかなか解消されません。私たちは、グラントデザイン2015を公表して、地域の実情に合わせ、問題を解決していくことにしました。社会の理解を得ながら、地域産婦人科医療システムの改革を目指していきます。第3の課題ですが、日本の産婦人科は、間違いなく世界のトップレベルにあります。しかし残念ながら、世界で必ずしもそれを認知されていません。私たちはこれまで、英文論文を書くことはもちろん、国際学会でも多数発表してきました。ただ、振り返ってみると、参加してきたのは欧米の学会だけにはあまり参加してこなかったように思います。これからは、こうした国々を支援するという立場に立ち、特に次代を背負う若い先生方が積極的に教育講演に行くことにより、日本の高い学問、医療レベルを認知してもらえるようにしたいと考えています。また、日本産科婦人科学会学術講演会には多くの海外研究者が参加しています。彼らに日本の医療、研究レベルの高さを知らせる良い機会と思っておりますので、学会の国際化をさらに推進したいと考えています。

皆さんの協力、支援を頂きながら、産婦人科の未来を切り開いていきたいと思っています。



公益社団法人日本産科婦人科学会  
理事長 藤井知行



自由討論で行われたポスター発表



会長講演 (峯岸敬学術集会長)

今回、産科婦人科内外の異なる分野間での連携を活かし、より充実した医療を提供して行こう、とのテーマの趣旨に沿って、産科婦人科医以外の方にも、生涯

第67回日本産科婦人科学会学術講演会を、平成27年4月9日から4日間の日程でパシフィコ横浜にて開催いたしました。会期中には、トータルで7,992名もの方にご参加いただき、これまでで最高の参加者数を記録する事ができました。今回はテーマを「知の連携inter-and intra-professional relationships」とし、群馬大学大学院医学系研究科産科婦人科教室教授の峯岸敬学術集会長のもと、プログラムを進めて参りました。

### 第67回日本産科婦人科学会 Annual Congress Report 学術講演会報告

### ワーク・ライフ・バランス webサイトご紹介

W.L.B. 日本産科婦人科学会  
ワーク・ライフ・バランス

みなさん、こんにちは。もうお気づきでしょうか？学会のホームページにワーク・ライフ・バランス(W.L.B)に関するページができました。とかく仕事に傾きやすい私たちの生活を見直していこうと思います。地域にまで十分な産婦人科医療サービスを提供するためには、私たち産婦人科医がまず健康でいきいきと働いていられることが大切です。

皆さんに現状を知ってもらうために、産婦人科医師数の男女別別の推移や、最近増加している女性医師がどのような働き方をしているのかなどをDATABASEに掲載しています。その女性医師の就労を支援するためにおこなわれている政策や、利用できるサービなどを「女性医師就労支援」として紹介しています。管理職のかたも参考にしてください。

事例紹介ではW.L.B改善のため各施設で行っていることを紹介いたします。こちらは皆さんの施設で取り組んでいることを紹介いたしますので、事務局に連絡をいただければ掲載していきます。また、学会がW.L.B関連で行った事業(学会の取り組み)や、先生方のONとOFFの過ごし方を掲載しています(わたしのON/OFF)。“あの先生が……!?”という発見があるかもしれません。内容は随時更新していきます。楽しみにしてください。

日本産科婦人科学会は産婦人科医のW.L.Bの改善を応援しています!

研修プログラムの演者として講演をお願いしました。幸い、多くの参加者の方に、異なる分野の新鮮な視点からのお話を聴いていただくことができ、大変好評でした。一般演題は、口演については、前回からのミニワークショップ形式を踏襲し、今回も、充実した討論が行われました。一方、ポスター発表は、従来の座長進行による発表形式では無く、今回初めての試みとなる、自由討論形式をとりました。運営上、発表・評価方法について周知が徹底しない等の問題はありましたが、評価者及び演者の皆さんのご協力をもちまして、トラブル無くプログラムを終えることができました。アンケート集計では、賛否両論、大変多くのご意見をいただき、反響の大きさを



e医学会カード受付

今回より、講演会及び指導医講習会の受付にe医学会カードが導入され、研修ポイント等履歴の管理もこのe医学会カードに統一されることとなりました。導入初回となる今回は、緊張と共に準備してまいりましたが、期待以上に多くの参加者がe医学会カードを利用してくださり、その携帯率は86・4%にのぼりました。これまでの学会の良い面を引き継ぎつつ、新しい試みを盛り込んだ学術講演会でしたが、参加者の皆さんをはじめとし、運営関係各所の多大なご協力のおかげをもちまして、成功裏に終えることができました。本当に、心より感謝しております。

感じております。今後につきましては、この皆さんのご意見につき十分検討し、よりブラッシュアップしたプログラムとなる様、第68回の準備が進められる予定です。

前回から開始された、医学生フォーラムでは、今年も、医学部6年生による、白熱したプレゼンテーションが行われ、既に、定番プログラムの一つとなった感があります。

今回より、講演会及び指導医講習会の受付にe医学会カードが導入され、研修ポイント等履歴の管理もこのe医学会カードに統一されることとなりました。導入初回となる今回は、緊張と共に準備してまいりましたが、期待以上に多くの参加者がe医学会カードを利用してくださり、その携帯率は86・4%にのぼりました。これまでの学会の良い面を引き継ぎつつ、新しい試みを盛り込んだ学術講演会でしたが、参加者の皆さんをはじめとし、運営関係各所の多大なご協力のおかげをもちまして、成功裏に終えることができました。本当に、心より感謝しております。

今回より、講演会及び指導医講習会の受付にe医学会カードが導入され、研修ポイント等履歴の管理もこのe医学会カードに統一されることとなりました。導入初回となる今回は、緊張と共に準備してまいりましたが、期待以上に多くの参加者がe医学会カードを利用してくださり、その携帯率は86・4%にのぼりました。これまでの学会の良い面を引き継ぎつつ、新しい試みを盛り込んだ学術講演会でしたが、参加者の皆さんをはじめとし、運営関係各所の多大なご協力のおかげをもちまして、成功裏に終えることができました。本当に、心より感謝しております。



情報交換会

産婦人科は、20〜30代において最も女性医師の割合が高い診療科。早くから積極的に男女共同参画に取り組んできました。

男女共同参画という仕事と家庭の両立をテーマにすることが多いですが、日本産科婦人科学会は一歩進んで「ワークライフバランス」に取り組んでいます。そして第67回日本産科婦人科学会学術集會において、さらには一歩進んで



## 産婦人科のダイバーシティ ～産婦人科医を続ける理由、 あなたのミッションは?～

第67回日本産科婦人科学会理事推薦フォーラム  
男女共同参画・女性の健康週間委員会企画より

「ダイバーシティ（多様性の受容）」をテーマにフォーラムを行いました。フォーラムではキャリアモデルとして6人の若手産婦人科医が自分にはできない仕事を自分の手でつかみ達成した体験を紹介しました。その後、多様な働き方の19人の若手男性・女性医師で、「産婦人科医を続ける理由」あなたのミッションは?と題して、産婦人科医を志した理由、仕事が生活や家庭に与えるよい影響、生活や家庭が仕事に与えるよい影響、上司・同僚・部下からの心ない一言、自分を育てた一言、そして産婦人科医として成し遂げたいことなどを話題にワークショップを行いました。

登壇者にはそれぞれ心に秘めるミッションがありました。目の前の女性を丁寧に診ること、地域医療や地域の女性の健康増進に貢献すること、自分を越える後進の育成、支えてくれた指導者への恩返しなど、ミッションは多様です。どれも産婦人科医療の重要な1ピースであり、お互いが持つ多様なミッションを認め合い、支えあい、全員野球ができることが、産婦人科医療全体の質の向上につながることを認識できました。

しかし到達点にたどり着くまでには、ライフプランやワークライフバランスなど、解決しなければならぬ問題を抱えまです。子育てや自身の病気などで生活を優先せざるを得ない状況になると、「キャリアダウン」を恐れる方もおられるかもしれません。しかし、多様な生活体験はいい仕事をするために必ず役に立つということも、ワークショップの中で確認できました。

産婦人科医療の発展のためには仕事の内容、働き方、生活など、すべての分野でダイバーシティが必要だと認識できたことを受け、横浜宣言2015年春」を提言しました。女性を診る診療科だからこそ、医学界のどの団体よりもダイバーシティを推進する団体でありたいと思います。

「ダイバーシティ（多様性の受容）」をテーマにフォーラムを行いました。フォーラムではキャリアモデルとして6人の若手産婦人科医が自分にはできない仕事を自分の手でつかみ達成した体験を紹介しました。その後、多様な働き方の19人の若手男性・女性医師で、「産婦人科医を続ける理由」あなたのミッションは?と題して、産婦人科医を志した理由、仕事が生活や家庭に与えるよい影響、生活や家庭が仕事に与えるよい影響、上司・同僚・部下からの心ない一言、自分を育てた一言、そして産婦人科医として成し遂げたいことなどを話題にワークショップを行いました。

### 横浜宣言2015年春 産婦人科医を続けるための10か条

1. 人や社会の役に立てる仕事であることを誇りとします。
2. さまざまな志を持つ仲間たちの、それぞれのミッションを尊重します。
3. ワークライフバランスの推進に取り組みます。
4. ライフイベントによる労働の制約に対して、多面的なケアがなされるように働きかけます。
5. ケアへの感謝を忘れません。
6. 健康に働けるよう、労働環境を改善する努力を惜しみません。
7. 努力に対してフェアな評価を心がけます。
8. 産婦人科の仕事の多様性を活かし、活躍の機会が公平に与えられるように努力します。
9. さまざまな立場の違いを強みとできるよう、ダイバーシティの推進に努めます。
10. ミッションを果たすために応援してくれている上司・同僚・後輩・家族への感謝を忘れず、産婦人科医療への貢献を通じて社会に還元します。



カリフォルニア大学サンフランシスコ校 (UCSF) 付属の Medical Center 見学

ACOGは臨床の話題がメインの学会で、臨床医の知識のアップデートやレジデントに向けた超音波検査や子宮鏡手術の半日がかりのハンズオンプログラムが組まれています。ランチョセミナーは日本と同じ形式もありますが、「Lunch with the Experts」という9人テーブルそれぞれに1人ずつの専門家を囲み、講義と質疑応答を交わすという企画が特徴的でした。テーブルを囲んだ面々は50歳くらいの開業医さんから医学生まで様々で、食後のコー

日本からの派遣団もボスター発表があり、各タブレットを行いました。私は東日本大震災が不妊症患者に与えた影響を報告し、FIGOのジャーナルの元editor in chiefに興味を持って頂きました。このよう

ヒーを飲みながら子宮内膜症の治療について熱い議論が交わされました。毎夜様々なレセプションが開催され、全米のレジデントの代表が集まる会では米国のレジデントの生活や悩みといった生の声を聞くことができました。

若手医師の皆様には、専ら、個性豊かな日本の若手医師と出会えたことです。各大学の現状やお互いの目標を語り合い、良き友人になれたことは代えがたい財産となりました。

このプログラムを経験して得たことは沢山ありますが、特に次の2点が大きな収穫でした。1点目は、米国では臨床を行う人と基礎研究を行う人が別なため、ACOGは純粋に臨床的学会になります。臨床と基礎的な研究を又にかけて行っている医師が多い日本の学会は面白いと再認識でき、自信に繋がったこと。2点目は、米国のレジデントとの交流もさることながら、個性豊かな日本の若手医師と出会えたことです。

## 日米若手医師交換プログラム参加体験記

The American College of Obstetricians and Gynecologists



米国産科婦人科学会

日本産科婦人科学会の若手医師育成プログラムの企画として、2015年5月2日から6日まで米国サンフランシスコで開催された米国産科婦人科学会 (American Congress of Obstetricians and Gynecologists: ACOG) のAnnual meetingに参加させて頂きました。このプログラムは、日本と米国の若手の医師を互いの国に派遣し、交流と行うことを目的としており、日本からは5人の若手医師が参加しました。



私が産婦人科医を志すようになったのは学生の頃の実習がきっかけで、初めて出産を目の当たりにし、生命の力強さや女性のたくましさ魅了され、女性特有の悩みを同じ女性として考え、寄り添いながらサポートしていきたいと強く感じました。また産婦人科の先生方の生き生きとした姿をみて、私もこんなふう楽しく仕事ができたらいいなと憧れを抱いたことも大きな理由の一つです。

将来は産婦人科を志しているからこそ、初期研修の2年間で他の診療科、とくに内科をしっかり勉強したいと考えています。患者さんの症状や身体所見から鑑別を挙げて診断、治療をおこなうという診療の基本



女性特有の悩みを同じ女性として考え、寄り添いながらサポートしていきたい

まだまだ医師としてスタートラインに立ったばかりで自分の未熟さに落ち込むことも多々ありますが、先輩方の背中を見ながら一歩一歩理想の産婦人科医に近づけるように努力していきたいです。

那覇市立病院・古波蔵 美幸

## 研修医の声

研修医の方々に、産婦人科を選んだ理由や、産婦人科に寄せる夢を語って頂きました。

幼い頃より祖母、両親が産婦人科医として働く姿をみて興味をもち、医師を志しました。

私は研修医として大学病院で周産期集中コースを選択することで、当たり前ですが正常分娩だけではなく妊娠時のリスクの厳しさを改めて知ることができました。

しかし、そのことで産婦人科医の必要性を再確認することができ、産婦人科医を目指す上で知識や経験から養われる判断力の大切さを痛感致しました。また麻酔科、小児科、救急科など他科との連携で命を救っていく場面は大学病院だからこそできる大変貴重な経験をさせていただきました。

産婦人科は婦人科疾患に対する手術や化学療法、高齢妊娠が増える中での不妊治療の需要の増加など、産婦人科の中でも自分に適した分野がみつけやすくなると思います。

女性の一生に寄り添うことのできる産婦人科医への魅力は私の中では変わらず、これからはより専門性を持って学ばせていただきたいと思っております。

より専門性を持って学んでいきたい



杏林大学病院・宮川 実果

【▲全文はWEBサイトに掲載しています。ぜひご覧ください！】

